



「ヘイトスピーチ、聞き流すのではなく」

…というコラムがあった。現代文の「ファンタジー～」の主張と重なる部分もあるし、小論文の参考にもなる。(朝日新聞10月19日)

*

アテネの太陽は、たとえばアクロポリスの丘を朱に染めて昇り、遺跡群を紫の影絵にして沈む。光の気まぐれで古都の空気は百の色になる。

多彩な暁の中で、金色のそれが数年来ギリシャを騒がせている。極右政党「黄金の夜明け」である。債務危機の一昨年、この党は定数300の国会に18議席を得た。誇り高き祖国の復活と国民の連帯、それを妨げる不法移民の掃。主張は愛国、そして排外だ。

昨秋、党を批判する男性歌手が殺され自称党員が捕まった。警察は摘発に乗り出し犯罪組織を作った疑いで党首ら国会議員が逮捕された。

移民への暴力は日常だ。ギリシャ国籍を併せ持つ日本人女性は昨年、黒ずくめの約20人が地下鉄で外国人を追い回すのに出会った。「私も異邦人。彼らと目が合った時は怖かった」(中略)

移民への「免疫」があると思われる国々でも、異民族や異教徒への攻撃は口先にとどまらない。北アフリカ出身者ら数百万のイスラム教徒が暮らし、一方に欧州最大のユダヤ人社会を抱えるフランスとて、例外ではない。

在仏ユダヤ組織代表会議が公表した人や物への「反ユダヤ的行為」は、去年の倍に近い勢いだ。イスラエルによるガザ侵攻への反発も一因らしい。ヨナタン・アルフィ副会長が言う。「移民の血を引く若者と、その排斥を叫ぶ極右が反ユダヤでは共鳴する。差別の濃淡は民主主義の物差しなのに」

他方、米同時テロから様々な偏見にさらされるムスリムたち。今は「イスラム国」の乱行が敵

意をあおる。

全仏イスラム評議会によると、信者やモスクへの攻撃は昨年、警察沙汰だけで前年の1割増、今年はその3割増のペースという。ネットでの中傷は数知れず、開祖ムハンマドらしき人物をブタが丸焼きにする絵まである。

評議会のダリル・ブバケール会長は「イスラム＝暴力的」の誤解を嘆く。「どんな宗教も人権と平和を尊び、寛容でなければいけない。女性をさげすみ、人質を惨殺して何が聖戦か。互いを理解しようと努めるより、敵対という易(やす)きにつく者が多すぎる」

*

行動や感情表現には国柄が出るが、そこに優劣はない。異文化と接した時にこそ、度量と知恵が試される。

イスラム教徒が支配する聖地、エルサレムを奪い返そうとした十字軍。下等と思い込んでいたオリエント文明の先進ぶりに驚き、兵士らは東の技術や産品を持ち帰った。知ろうともせず、「やつらはそういう民族」と決めつけてかかれば、不和や孤立を招く。

取材中、礼節の国でヘイトスピーチなんてと何度か驚かれた。憎悪の言葉はやがて本物の暴力に転じ、日本の定評をむしろむだらう。ヘイトへの慣れや無関心は、それを弄(ろう)する者を増長させる。ヘイトは雑音ではない。聞き流さず、拒まなければいけない。

憎み合うことはたやすい。異文化、異教徒、異民族。異の一字に責任を負わせて思考停止するのは楽である。東京五輪の理念の一つは「互いを認め合おう」だと聞いた。ならば言論の作法くらい、今から正しておきたい。